

## 硯と墨を科学する

### 文房四宝の1つ

筆、硯、硯、紙のことを文房四宝といいます。いずれも書や水墨画を楽しむときには欠かせないものばかりです。

ここで、四宝のなかから、とくに硯を取り上げたのは、適した硯を選ぶことで、水墨画を描くのが楽しくなり、一生ものとして親しめるからです。その楽しみ方を紹介しようと言うわけです。

多くの硯は、墨を磨って貯める「池」があります。墨をする部分(陸)だけで池がない硯はあまり使われません。あまり大作を描かず、一気描きをする私は、貯めた墨が宿墨にならないように、要る量だけ墨をするようにします。そのため海は使いませんから、海がない「硯板」や陸の大きな硯を好んで使います。

また、使い込んでない新しい硯を手に入れたとき、硯面が粗すぎるときには磨いてから用います。そうすることで、磨墨が美しくなり、硯に愛着も湧いてきます。

一生ものの道具という意味では、筆も大切に取り扱いえば一生ものです。実際に持っている筆の過半は、学生時代から使い続けた30年選手のベテラン揃いです。そうはいても、文化大革命以後の唐筆は毛の質と耐久性が落ちて、一生ものにはならないようです。そのため、最近では、国産の筆を求めることが多くなりました。私の地元滋賀でも、雲平筆という良筆が手に入ります。硯は、ほとんどが中国製で、とくに古硯が良いと思われまます。

墨と紙は墨や紙は消耗品ですから、作品にあった物を都度求めるのがよいと思います。

### お気に入りの硯！

お気に入りの硯は「端溪」です。

一番のお気に入りの硯は、呉門顧二娘ならぬ顧三娘の銘が入っています。顧二娘なら清代の希少な名品なのですが、どうやら贋作のようです。この贋作は、型どおり、側面に「呉門顧三娘造」と「飛人磨墨 墨磨人」の短文が刻され、裏面には「硯面が絹のようにすべすべで、擦った墨も不滞、筆もなめらか、これを東坡硯と銘づける。」という意味の漢文が細刻されている。裏面に刻されているように実際にすべすべしており、重量感があって、どっしりしていて使い勝手も良い。偽物とは思えないほどの貫禄がある。偉大な贋作です。

他のお気に入りは、水墨画をはじめた記念に求めた端溪硯。

求めたその日から、10日もかけて、指と研磨剤(2万番のメッシュ相当)で科学標本のようにつるつるするまで磨きだし、しかる後に、日頃用いる墨で逆に8000番相当まで表面を粗らしました。手間暇をかけた甲斐があって、発墨はやや遅いものの墨色がすこぶる良い。その墨色がお気に入りの理由である。

上記努力の副産物は、硯を求めた京都の老舗の支配人さんと知り合ったことである。硯の目利きに卓抜した支配人さんが「水墨が好きな順大に丁度良い」と取り置きしていただいた硯板に一目惚れ。この硯板が今では糟糠の妻のごとき存在となった。

水墨画では、墨色を出すために、皿に調墨したうす墨を筆にすわせ、硯の陸に広がった濃墨を筆に引っかけるようにして取るので、硯板は都合がよい。とりわけ硯の中程に適度な窪みがあると、水墨では使いやすい。陸の真ん中を毎日使い込むとそうなる。窪みがあると、いつも新鮮な墨が硯の真ん中へ集まるのありがたい。母垂風が私にくれた練習用の硯は、母の猛練習のおかげで陸の中央に程良い窪みがあって極めて使いやすい。程よい窪みは、正しい練習の賜であろう。小生も、お気に入りの数硯を一生かけて使い込んでいきたいものである。

### 硯って何？

硯の役割については、墨をすることくらいにしか説明されません。墨をすることとは一体どういう仕掛けになっているのでしょうか。そこで、本業の工学の知見と硯磨きの体験をもとに、多少の私見を述べてみようと思います。

墨は、菜種油や松根油を燃やして集めた煤を膠で固めて乾燥してあります。煤はミクロン(1mmの千分の一)かその1/10位の径を持つ微粒子です。墨は細かい煤を固めた人工の「砥石」のようなモノといえます。

一方の硯は、同じくらい細かい土の微粒子が川底で積り、その地層が造山活動で圧縮されて岩(熱がほとんど加わっていない粘板岩、時として凝灰岩)となったものです。

(砥石は落としたりすると面がはがれるように割れてしまいます。また、金が模様で出ていたりするのはそのためです)硯の表面には、その細かい砂が適度に凝結して「鋒ぼう」といって「下ろし金の突起」様に目が立っています。これが立っているほど速く墨が下りるわけです。このように、墨をすることを大根下ろしに譬えると、大根が墨で、下ろし金が硯ということになります。きめ細かい墨が欲しい水墨画では、きめ細かい墨と硯を選ぶ必要があるわけです。

書では、墨下りが速いことが好まれます。墨をたっぷりと必要とすればこそその好みかと思われます。水墨画では、少量の墨をすれば良く、すみ下りよりも墨色を重視します。

このように、墨と硯の組み合わせによって、欲しい墨色や墨下りの速さが得られます。「墨はゆっくりと磨れ」とか「人肌のような硯が良い」とされるのはきめ細かな粒子の性質をうまく利用する先人の知恵であることがわかります。

### 水墨用の硯の見立てと手入れについて！

きめ細かい墨がすれる硯を選ぶには、硬すぎる石は避けましょう。表面がつるつるし過ぎるのは避けるとしても、柔らかめな端渓はかなりつるつるしていても大丈夫です。むしろ表面が粗い端渓は意味がないので避けるべきでしょう。表面の粗さでは善し悪しが分かりにくいので、「硯の面に指を置き、指の形に汗をかく硯を選ぶ」選び方がわかりやすいと思います。古硯は自然に鋒ぼうが出ていますが、国産の硯は良い石であっても600～800番手ぐらいで仕上げていることが多いので、1年ほどは使い込むことが必要です。

黒一色で墨色を創る水墨画には、何と言っても柔らかめの端渓がお勧めです。新端渓なら8000円位からあります。新しいものより古い端渓がおすすめ。古いものでも、2～3万円で「汗をかく

ような良モノ」が見つかります。根気よく探してみましよう。ただし、見つけても買わなければ、二度とめぐり合わないのが、天然物の定めです。

### **手入れ**

「使ったあとは必ず洗う」ことが大切です。宿墨を残すと硯の良さがでませんし、良い墨色は期待できません。万が一、宿墨がついても、硬いモノや市販の砥石でこすってはいけません。水やお湯に付けやわらかくなってから布で拭き落とすようにしましょう。どうしても砥石が必要なときは DIY の店で「6000番くらいペーパー研磨紙」を求め、平らに磨くと良いでしょう。